

「医療用麻薬」は
がんの痛みにとっても有効なくすりです

しかし、
麻薬中毒のイメージがあるために
医療用麻薬を敬遠され
痛みがしっかり治療されず
つらさを我慢している患者さんも
少なくありません

医療用麻薬を含めた痛み止めを
正しく使うことで、
患者さんやご家族が
安心して治療に向かえるように、
元気に生活できるように、
身体や気持ちの力を保てるように、
お手伝いしていきたいと考えています

茨城県立中央病院
緩和ケアセンター
緩和ケア病棟

〒309-1793
茨城県笠間市鯉淵 6528
T E L 0296-78-5420
F A X 0296-78-5421

「医療用麻薬」について



茨城県立中央病院
緩和ケアセンター
緩和ケア病棟

医師や看護師から、「麻薬」という言葉を聞き、不安を感じられる患者さんは多いと思います。

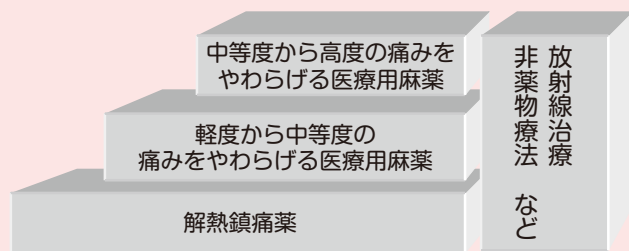
このリーフレットでは、患者さんから尋ねられることの多いご質問について、お答えしていきます。

「医療用麻薬」とは？

モルヒネに代表される、がんなどによるつよい痛みを抑える鎮痛剤をいいます。

痛みを脳に伝える神経の活動をおだやかにすることで、鎮痛作用を示します。

息苦しさなど、痛み以外のつらい症状に対して使うこともあります。



上の図のように、痛みの程度に応じていろいろな薬や、薬以外の方法を組み合わせて、つらい痛みを抑えられるようにします。

数十年前は、医療用麻薬の正しい使い方が確立されておらず、そのときの記憶のために、今でも「麻薬は恐ろしい」と思われていることが多いようです。しかし現在では、世界共通の正しい使い方が定められており、安全に使えるようになっていきます。

どんな副作用がありますか？

眠気、吐き気、便秘が主な副作用です。

眠気は開始後すぐに一時的にみられ、数日間で自然に良くなることが多いです。

吐き気には吐き気止め、便秘には下剤で対応します。

正しい使い方を守れば、医療用麻薬によって幻覚や意識障害がでたり、呼吸が止まったりすることはありません。

麻薬をつかうと中毒になりますか？

医療者の指導のもと、痛みや息苦しさなどの「症状」に対して正しく使用する場合には、中毒（薬物依存）になることはありません。

麻薬で寿命が縮まりますか？

縮まることはありません。

多くの研究で、「医療用麻薬の使用」と「いのちの長さ」には相関がないことが証明されています。

麻薬は「さいご」のくすり？

医療用麻薬は決して「さいごだから」という理由で使うものではありません。

痛みや息苦しさなどの症状があるときには、病気の進行度や時期、抗がん治療の有無にかかわらず使うことができます。

症状が全くないのに使う、ということもありません。

一度始めたら、やめられないの？

治療や経過によって、痛みや息苦しさなどの「症状」がよくなった場合には、やめることができます。

ただし、急に中断すると「退薬症状」がでるため、医療者の指導のもと、少しずつ減量していくことが必要です。

使う期間が長くなっても問題はないので、症状があるときには無理にやめる必要はありません。

「飲み薬」「貼り薬」「点滴・皮下注射」はどう違いますか？

医療用麻薬の投与経路によって、効果や副作用に違いはありません。

内服ができるかどうか、症状のつよさ、などによって、投与経路を選択します。

「点滴・皮下注射」が最も微調節しやすいため、“強い症状をできるだけ早く抑えたい”という場合には、まず点滴で開始し、量を調節した後で飲み薬に変更する、ということもできます。

どうしても麻薬はつかいたくないのだけど・・・

くすりのことを自分で考えて決めたい、というのは大切なお気持ちです。

まずはそのご希望を医療者に伝えてください。

「麻薬を使うことの是非」だけでなく、患者さんご自身が「どんな生活をおくりたいか」ということも含めて考えていきましょう。